

## その2

### 97年村研大会参加記

池本良教

信越地域は私の研究フィールドの1つである。私は参加できなかったが、エクスカージョンの訪問先となっていた長野県栄村には、中山間地域問題とそれを克服する取り組みが日本の縮図のように存在しており、いくつかの集落システム（史的展開と社会的構造）と人々の生き方（労働と生活）を調査するために、毎年のように訪問している。

そのためその栄村の隣である新潟県津南町で行われた今年の大会には、大きな期待を持って参加した。ここから何が見えてくるだろうか。テーマ・セッションのテーマである中山間地域問題について大会参加者は何を持ち寄ってくるのだろうか。

個別報告の数は、当初予期されたような分科会方式をとらずにすむほど少なかったようである。そのため各報告に集中することができたが、それぞれは大変興味深く、議論したくなる論点が豊富にあったと思う。ただ、村研の報告としてふさわしいものとするために、全体として、何を問題にしているのか、結論または論点は何なのかももう少し詰めてもらいたいと感じた。

テーマ・セッションは、幅広く中山間地域問題の課題を取り上げており、大変興味深く報告を聞かせていただき、視点とアプローチには新しい広がりがあった。しかし、それぞれの報告は論点を提起しているのであるが、報告者間、また報告者とフロアとの議論の交通整理が十分ではなく、問題を解きほぐす時点で消化不良を起こしてしまった。準備段階、本番ともに時間的な問題もあるのだろうが、大会が村研の研究の蓄積とその継承・発展の場であるとかたくなに考えていると、どうしてもこの点で私も含めて会員と理事会・事務局双方の今少しの奮闘に期待してしまう。

シンポジウムもおもしろい企画であった。大会開催地を起点にして問題と課題にアクセスするという手法は重要である。しかし、取り上げた対象となる主体に、人々と村落が見いだせなかったのは私だけだろうか。

ここ数年まじめに大会には参加しているのであるが、村落研究の対象が広がってきた感がある。このことはもちろん問題の所在と研究の方法が従来のものでは把握できなくなってきたことの反映であろうが、村落の主体であるそれぞれの人々とその集団である村落それ自体に論及する研究と報告が少なくなってきたように思われる。もちろん行政や環境等も村落研究の対象になることは否定しないが、それらの本質的な主体である村落や人々がどうも見えてこないのである。

村落研究のモチーフは実証研究にあると思う。はじめにふれた栄村は地域研究対象の宝庫であり、地域経済学、民族学、農業土木、観光学をはじめとする多くの研究者が研究を蓄積してきている。こうした諸学の成果も参考にしながら、地域の人々の生き方から社会のシステム展開を学ぶために、私は地域研究としての村落研究に邁進していきたいとあらためて考えた。

（農政調査委員会）